



新柳
新稿

浮
卷
底

初編

四

號	四	第	
一組	至	自	全部
四	四	一	十
冊	卷	卷	冊

14
3157
42(4)



44
3157
42
(4)

柳髮新話浮世床初編卷之四

東京戯作者 式亭三馬戯編



垢とためく動極へび
 けびをさうけり
 廊人這入るぬ人を通人といふ女を買はして今をはりあ考
 らせられ速うれ身体を減さう。野暮ごと云こさうだが
 悟りてえれおそんまりのふ短
 遠移人角五敷見あ
 世なるの多人渡りト川折泉舟のうがうそら移人通この
 通り者よといわれで身体を洗とよりのも野暮と

抄紙目

云々金をためて方が利方よのそねをあつて迷ふらん
 「あれもあらとら迷つてゐるがらのさ苦の内よちと修行
 志てえて早く志を洗ふがらよおおなれが旅をど令が入る
 「そつてらら早で遊入でもおほ細子あつた馬席よさねぞ
 面白のぞ馬席よさねとまきぐつらちやア客うおは并ど
 「あんでも高きお糞牛してん縁入おもはしくとまきと
 かアも焼餅のちうど物あも苦勞がうとてま命
 が延るからいこうよ其証拠ありとゆりよのころおれを

平生
 苦んでんはら世日く安樂ぞ「若くてもおめ入らちの
 中うお早く心ばくと大丈夫が急角若者もさう行後
 めのさ「いせあをいびよてアさんおのささく聖公賢公
 「あれぞアさんあら「ハイ明日十三のあつ「あれがぬ
 ありがらん中とのるぞお膝がうつてすま「田てめ入まうと
 痲をつけめぞ「そのやア遠舟をよくりまゐる人「髪をさん
 りあちらと油をほけそめくうせ水髪をまらうア結と毛が

甘茶を嘗せしむとあれはまが好次也とあやうらうら
 中は「十三」中まじりの減移入奴等どナツとくを
 何よあつらひう 簡入らる巻きぞもうと職人よらる
 へ。ヤイもあつらをとりう。今并盤をわく二の度九九と見
 へ。へらうめ命が續らる内へ逃てゆれ。ヤイもあつら
 笛の考らるも天窓の在者れららるの世即めあつら
 海を早くゆせとヨイ トはまなまをてつナイ
 洲市ごのう慌ゆるせ轉き場らるの足もき用なる人が

悪の「まはる人も主人も撰むるがら人もまはる人も撰む
 後と身上の爲に中つらぬの一人の身体の妙なるはの
 なる人さ人能るが速く「ゆりも運次守よ智恵も移入
 人々命を持と大勢の人出あつらるるわてかる「はうらと
 多くが非等もよ「ゆひら如在移人とらるる人が一生
 多きとて終るのがあはし「そこが世の中どどかたゆ「如仕
 後とらら内よ万能は達して一の口もぬ奴がまはるの
 こそが仕方が移人物よ一生涯らうくまらばきあつら

ひろくろあま記と居と膳で飯を食らて日本に格までりさるお
 けは移入タタ五町六町あら入入キラても半日余もからうら
 写入合移入一日本に格まちやアある入と朝起して朝目谷
 ぐの内へ往く身とさらせ一お様の喧よめらが
 中のふまをはく中の移入者どのけくらいのさらしうせ
 と朝起しののせらびとうら記らる家内の者と朝飯食ら
 食らると移入と移入とまお居膳ぐ食らも能がせめくらぬが
 食と移入と移入と一人移入て食ら移入たれどの一ア

自身洗う氣ふらうふとて平々々と物どいづも何にも
 飲でらせらうとうらいふらうて中の者と突掛るこ
 一悪の酒どの一二の者どのせ一と朝も突掛る一二の者
 一酒どの一二の者どのせ一と朝も突掛る一二の者
 たままとてかねが能お一とぐ不便とうらいとまはのよ
 あらうとを出せらるとよ東ははとはららる一とれども酒のこら
 ありがらどよ一ハテ其のままと買物の度おらう通を移入
 是非は法を履く中とまはしあらう内の顔とせの二三のめと

りの因^{うち}ごころ居^ゐの縁^{ゆかり}縁^{ゆかり}入^{いれ}も^もり。實^{まこと}誠^{まこと}の涉^{せつ}を^を持^もつ^つが^がは。
 おら^らが^が因^{うち}入^{いれ}する^す。今^{いま}が^が日^ひ月^{げつ}令^{しづ}も^も稻^{いね}妻^{つま}令^{しづ}も^もら^らぬ^ぬも^もら^らや
 と^とん^んじ^じの^のり^りあ^あふ^ふせ^せひ^ひく^く。その^{その}せ^せ喜^{よろこ}ぶ^ぶが^がほ^ほい^いと^とま^まと^とあ^あら^ら
 かん^{かん}ぎ^ぎご^ごと^とう^うで^で令^{しづ}持^もつ^つふ^ふる^るま^まら^らは^はし^しら^らよ^よの^のと^と令^{しづ}食^くて^て一^{いち}生^{せい}
 終^{はつ}る^るが^が徳^{とく}き^き。そ^そか^か金^{かね}持^{もち}の^の根^ね付^{つけ}が^が別^{わか}れ^れた^たよ^よ。お^おら^らが^が隣^{とな}り^りの^の福^{ふく}を^を
 を^を入^{いれ}給^{たま}へ^へ幸^{さい}申^{まを}あ^あと^とけ^けあ^あして^{して}食^くう^うの^のも^も令^{しづ}食^くう^うと^とふ^ふ令^{しづ}食^くう^う
 た^ため^めて^て一^{いち}生^{せい}金^{かね}浪^{なみ}の^の番^{ばん}を^をふ^ふ抱^{かか}ら^られ^れと^と花^{はな}ま^まの^のご^ごめ^めん^んの^のふ^ふ漏^も
 と^とふ^ふが^が縁^{ゆかり}の^の並^{なら}び^び物^{もの}。その^{その}跡^{あと}を^を実^{まこと}子^こも^もな^なり^り他^{ほか}人^{ひと}ふ^ふ

そ^そつ^つり^りま^まる^るの^のご^ごは^はま^まら^ら福^{ふく}入^{いれ}利^り屋^やご^ごの^の一^{いち}人^{ひと}の^のあ^あら^らひ^ひな^なら^らと
 り^りが^が令^{しづ}持^{もち}む^むと^と大^{だい}氣^きな^なり^りの^の福^{ふく}入^{いれ}な^なら^らせ^せと^とま^まの^のせ^せえ^えの^のあ^あら^ら幸^{さい}抱^{かか}
 ち^ちて^てた^ため^めと^と今^{いま}の^の他^{ほか}人^{ひと}ふ^ふ唯^{ただ}ま^まる^るの^のご^ごう^うと^とま^まの^の大^{だい}氣^きな^なら^らせ^せの^のあ^あら^ら
 め^め入^{いれ}る^るや^やご^ご其^{その}花^{はな}ま^まの^のご^ご一^{いち}ハ^ハテ^テ運^{えん}が^がい^いと^とお^おら^らの^のご^ご好^{この}ま^まの^の
 が^が幸^{さい}あ^あら^らせ^せま^まる^るら^らま^ま。あ^あの^のご^ごの^の因^{うち}ら^らま^まの^の伯^{おや}母^{はは}ま^まの^の死^し令^{しづ}ま^まの^の
 千^{せん}五^ご百^{ひゃく}あ^あ女^{にょ}房^{ぼう}の^の里^{さと}ら^ら。紀^き念^{ねん}の^の地^ち面^{めん}が^が二^にテ^テ亦^{また}と^とれ^れる^る活^{かつ}券^{けん}が^が
 ふ^ふあ^あご^ごの^の八^{はち}百^{ひゃく}あ^あご^ごの^のと^とら^らの^の物^{もの}ご^ごう^うと^と大^{だい}恩^{おん}ら^らや^やア^アあ^あら^らか^か一^{いち}役^{やく}者^{しや}
 の^の給^{たま}金^{かね}を^を續^{つづ}け^けま^まら^らせ^せ。お^おら^らも^も他^{ほか}伯^{おや}母^{はは}ま^まの^のご^ご後^{あと}の^の

りどのおくひとらうら野宿のどくもせしお母のうら山坂やまのさかで寝後ねごゆて行脚あんぎやさしつと
 らうが徳とくが備そなりてあつら災わざいをさらふ今いま時の坊ぼううたうが
 徒と踏ふをはい行脚あんぎやふ出いでりて形かたちの芭蕉ばせうでも腹はらが芭蕉ばせうで縁えん入いら
 狼おろし小食こくねる「ハ〜」美み「何なにをお笑わらで」ト入いり合あひ合あひの
 おが〜くおが才さいむくりの子この「乳ち母ぼどんりあを遅おそるこの「今日けふ日びを
 以もとまき〜るお乳ち母ぼり
 以も新造しんぞうさぬのお出いでがめつと「ア何なにはく「芝居しばいと「今日けふ月つきを
 大分おほほしの「ナニなんと夜よ目め行いき「お供ともより縁えん入いり「田村いづみ造ぞう
 さぬのお供ともらやアまがうまうて不ふごごけお子こさまの縁えん入いり

行い縁えん入いきやア其その意いで〜るも縁えん入いりかひけはるる氣き少せうなる
 ううけお子こさまが庵あんあまあるる「乳ち母ぼどんり芝居しばい
 ようらおり〜入いりむがめつと「何なにがあるりナアコレク
 お遊あそさんおのぶらよ。そでとらびごと乳ち母ぼ大だいく〜りご。
 おらさぬのお田らあけぐもせしほと。それとを杖あし持もの
 食く上じやうでアサ。おより〜るる〜る「おのあ〜らう
 トラ〜入いり奥おくより「ナニ〜お遊あそさんお供ともの「ま〜たう〜ア〜く
 およりおのぶらお物ものをのけて〜した乳ち母ぼどんり上ありま

お供

おぼろもくもく入るいよりの物うねしう移入るねうううううう
 しのぶの腕はくしてまうねて入るうねアア入る。あいらの強情者
 ふうふう 對するおなまう移入ねエウくあ方一統なうううううう
ね松さん今此裏で巫女ういをよせ居るせ睡移入ね「うらのうア
 おも入るね「おれもきくうのね「死是ね「死是ね威勢が社ナコウ
 とやうからうしてううう。ちよび東ね「其因あらう移入ねト
 うぶら入ね「ヲしく夏の因で移入ね「まけるト。そのうア奇ねあはハニ
 とゆ入ねまうと
 大床の残ぬぐうのうぐて入ね「コウね「松ヤ。てめ入るも入るぞ案でねい

ね「山の女ねも寄せて入るね「まるといふはくねい
ね「うしみのたをうを恨むねうううね「おまやアねれね「さうも
 あけりやう約束のる遠ね「一人何を教ねまね「猪と百目
 買て中るやきごが此中の候もだめを食ね「うまの移入
 候ね「アコウ生けをよせるとナかうて死と眠ね「あるさうね「せ
ね「あのあまる湯入這入ね今耐ねうととととね「店は空ね中
 からうね「それぢやアさうさね歩ねあねれね「社ねのうがねあねるねこ
 コウ案の強ちお案ねてある女ね師ねの強ねとナ。案ねの合ね耐ねの強ね入

巫女の口をよせとさうぐさぬぐの
 おくまを委しくうがらして専成春
 二快目おさし半可も長その節
 法評判よろしく奉希ひ

筆耕 石原 駒知道

柳髮新話浮世床初編卷之下終

浮世床後叙

濃摺之魁

長身物也飛頭蠻坊反吐とは。
 清女が竹毛めきしめ物と附の通
 句な寝夫より毛まで長のら不佞
 三馬が安請合一寸少あはれと思
 乃亦此柏屋を名約束も羽立明々

